

2 . オーストラリアにおけるサッカーの「プロ化」の動向と背景

尾崎 正峰

はじめに

FIFA ワールドカップ・ドイツ大会の予選第 1 次リーグで日本と同組 (F 組) となったことを契機として、オーストラリアのサッカーへの注目が集まり、関連する報道もそれなりの数に上った。しかし、その視点は、あくまでも「日本代表チームが戦う相手としてどうか」云々というものであり、その歴史的、社会的背景にまで立ち入ってふれていたものはごくわずかであったと思われる。従来までの日本におけるオーストラリアのサッカーの「情報過疎」の状況がそのまま反映していたといえる⁽¹⁾。

このように、日本においては、ほとんど注目されてこなかったオーストラリアのサッカーであるが、その歴史は、オーストラリアの社会の変遷をとらえる上で格好の素材といえる。同時に、彼の地のサッカーは、現在、新たな動きの中にあり、現代のスポーツの特徴を鮮明に示している。ここでは、オーストラリアのサッカーの歴史と現状について、その社会的な背景とともに見ていくことにする⁽²⁾。

1 . サッカーはマイナーか? ~ スポーツ人気の「オーストラリア・スタンダード」

全国調査⁽³⁾の統計数値から見えてくるオーストラリアにおける「するスポーツ」「見るスポーツ」の現状は以下ようになる。

「スポーツ大国」「スポーツ天国」とも称されるオーストラリアの「するスポーツ」は、ウォーキング、スイミング、エアロビクス、ゴルフ、テニスの順となっている。

一方、「見るスポーツ」は、オーストラリア・フットボールが第 1 位で、続いて、競馬、モータ

ー・スポーツ、ラグビー・リーグの順となっている。サッカーは、クリケットに続いて 6 番目となっている。

「見るスポーツ」の第 1 位にオーストラリア・フットボールがあげられているが、オーストラリアでは 4 つのフットボール・コード (code)、すなわち、「フットボール」として分類される種目に、オーストラリア・フットボール、ラグビー・リーグ、ラグビー・ユニオン、そして、サッカー (アソシエーション・フットボール) の 4 種類がある。日本でふつう「ラグビー」と言われている種目はラグビー・ユニオンのことを指し、オーストラリア・フットボールとラグビー・リーグは、一チームの人数をはじめとしてルールが大きく異なっている。

それぞれのコードの州別の試合観戦の割合の違いを見ていくと、オーストラリア・フットボールは、メルボルンを州都とするビクトリア州、そして、南オーストラリア州、西オーストラリア州、タスマニア州、北部準州において圧倒的な人気を誇っているが、シドニーを州都とするニューサウスウェールズ州やクイーンズランド州では一桁台にとどまっている。

ラグビー・リーグの場合は、逆に、ニューサウスウェールズ州やクイーンズランド州、そして、オーストラリア首都特別地域で高くなっている。オーストラリア・フットボールの人気の高いビクトリア州などでは数値は低い。

ラグビー・ユニオンは、上の 2 つのコードと比べると全般的に数値は高くない。その中で、オーストラリア首都特別地域がもっとも高く、続いて、ニューサウスウェールズ州、クイーンズランド州である。

残るサッカーは、実際にプレイしている人の割合は、「見るスポーツ」での「人気度」では圧倒

的な差をつけられているオーストラリア・フットボールと大きな違いはない。その意味で、オーストラリアにおけるサッカーは、「見るスポーツ」よりも「するスポーツ」としての性格の方が強くなっているということもできる。ただし、テレビで放映される種目、総放映時間、視聴率などの要素を加えれば、オーストラリア・フットボールやラグビー・リーグとサッカーのオーストラリアの社会における浸透度、その差は大きいということが出来る⁽⁴⁾。

世界の中で、サッカーは数多くの人々を惹きつけるもっとも「メジャー」なスポーツといえる。しかし、オーストラリアでは、若干、状況は異なっている。「グローバル・スタンダード」に対する「オーストラリア・スタンダード」とでもいべき特殊な状況がオーストラリアにあるといえてよいであろう。

歴史を紐解けば、イギリスによる入植、移民の増加と連邦国家の形成。この過程で生み出されてきた社会の「支配層」と移民（あるいは、労働者階級）との対立と緊張は、その後、長くオーストラリアの社会のあり方を規定するひとつの軸となった。

こうした過程において、サッカーは移民が行うゲームととらえられるようになっていく。とくに、第二次世界大戦後の移民によって主導されたこともあり、「エスニック」なイメージがつきまわっていった。加えて、ゲームの中で起こった「暴力」という要素も絡み合っ、社会におけるマイナス・イメージが形成され、世紀の変わり目を越えてもなお残存することになった。このことは、1970年代以降、いわゆる白豪主義から多文化主義へと国家政策が転換する中であって、人々の移民、エスニックに対する意識のズレのようなものを示しているといえる。

このように、オーストラリアにおけるサッカーの比較低位な位置づけは、歴史的、社会的に形成されたといえる。その意味で、その要因は、オーストラリアの社会の歴史を読み解く中で明らかにされなければならない。

2. オーストラリアにおけるサッカーの変容

前項でふれたように、オーストラリアにおけるサッカーは、他の種目との比較において低い位置づけが歴史的に形成されてきた。そんな中、FIFAワールドカップ大会に、1974年以來8大会ぶり2度目の出場を果たしたことは、大きな意味を持っていた。それは、オーストラリアのサッカーにおける現在の変容のひとつの「結果」であった。その「結果」を生み出す流れは、少し前から始まっていた。

(1) サッカーの「プロ化」

～「現代(ヒュンダイ)Aリーグ」の発足

2005年8月、従来までのセミ・プロ的な National Soccer League を大幅に改変し、オーストラリア初の本格的プロリーグ「現代Aリーグ」が発足した。「Aリーグ」の創設を、日本における実業団リーグからJリーグへの転換になぞらえることができるかどうかは、今後の動向をふまえてとらえていく必要があるが、オーストラリアのサッカーにとっての歴史的な転換点ということができる。

現時点においてとらえることができる特徴は、第一に、その運営・経営を支える基盤となるスポンサーの構成である。まず、グローバル化の進む現代社会の反映として、「現代(ヒュンダイ)自動車」という韓国の多国籍企業が冠スポンサーとなっていることがある。そして、メディアの世界戦略とスポーツの関係は緊密なものがあるが、メディア産業の中の“巨人”である「FOX SPORTS」が加わっている。また、こうした国家の枠組みを超えて世界的な活動の拡がりを見せる企業群と同時に、オーストラリアのシンボル企業である「カンタス航空」と電気通信企業「テルストラ」がスポンサーとして名を連ねている⁽⁵⁾。

「Aリーグ」の特徴の第二点目は、オーストラリアのサッカーにとっての基盤であったエスニック・コミュニティと切り離して、「都市」を基盤とするチームへ編成替えした点である。シドニー、メルボルン、ブリスベン、パース、アデレードなどの他に、ニュージーランドのオークランドまで

も取り込んで、1都市1チームを基本とする8チーム体制に組み替えた⁽⁶⁾。ここには、チームの基盤をエスニック・コミュニティから都市へと転換させることは、サッカーの人気、拡がりを実現するために必要不可欠のものであるとする戦略上の認識があるといえる⁽⁷⁾。

こうしたチームの再編成の意味を見ていく上では、オーストラリア社会における移民とそのコミュニティ、ひいては、エスニシティをめぐる状況に目を向ける必要がある⁽⁸⁾。

ひとつ事例を挙げるならば、サッカーのローカル・チームの基盤としてのエスニック・コミュニティの変容がある。ヨーロッパ地域からの移民の減少、すなわち、「母国」からの移民の減少、そして、移民第2世代、第3世代の数・割合の増加が同時に起こってきている。とくに、後者については、「若い」世代の自らのアイデンティティへの問いとともに、オーストラリアでの社会上昇を果たしていく上で Australianess (オーストラリアらしさ) を体現していくことが必要不可欠という現実がある。こうした狭間に立たされる世代にとって、「故国」に対する意識、そしてエスニック・コミュニティの位置づけは、以前とは異なるものとならざるを得ない。

(2) 「オセアニア」から「アジア」へ

オーストラリアのサッカーをめぐるもう一つの大きな動きとして、オーストラリアがその設立に深く関わり、長く中心的な役割を演じてきたオセアニアサッカー連盟(OFC:1966年設立)からアジアサッカー連盟(AFC)への所属変更が認可されたことがある。

その理由として、FIFA内ではオセアニア地域の位置が低く、ワールドカップ大会への出場国の枠がAFC側の方が多(オセアニア=0.5枠、アジア=4.5枠)ため本大会出場への可能性がより高いこと、レベルの高い国々が加盟しているAFCに属していた方が競技力向上にもプラスになること、などがあげられている⁽⁹⁾。

おわりに

現在のスポーツを特徴づけているものをキーワード風に並べるならば、グローバル化、メディア、商業化などとなる。とくに、メディア主導によるスポーツの変容は顕著である。

オーストラリアにおいても例外ではない。本稿でふれてきた現在のサッカーの変容も、こうした流れの中にある出来事といえる。そのほかの種目を概観してみても、クリケットの「one day match」、そして、ルパート・マードック氏の「スーパー・リーグ」構想はラグビー・リーグの再編という帰結を見た。また、「ローカル」種目のオーストラリア・フットボールをメディアに載せるべく、その性格転換が図られている。

一方、こうしたメディア主導によるスポーツの変容に対する社会、ファンからの反発も起こってきている⁽¹⁰⁾。

ローカルなるものに覆い被さるグローバル化の波。ローカル、あるいはファンからの異議申し立てとその可能性はあるのか。これまでとは異なる流れはどのようなものとなるのか。こうした視点が今後検討される必要がある。

<注>

(1)象徴的であったのが、予選組み合わせ抽選会直後の川淵三郎会長の発言であろう。川淵氏も「オーストラリアのことはよく知らなかった」と後に認めている。

(2)本稿は、昨年度の月例研究会(2006年1月)での発表をもとにしているが、紙幅の関係から、史資料、データ、参考文献などの多くを割愛している。詳細については、別稿(「移民、エスニシティとオーストラリア・スポーツの展開」高津勝・尾崎正峰『越境するスポーツ』創文企画、2006)を参照していただきたい。

(3)Australian Bureau of Statistics (ABS), *Participation in Sport and Physical Activities 1999-2000* (Cat. no.4177.0). ABS, *Sports Attendance April 1999* (Cat. no.4174.0).

(4) こうしたコード間の差は、メディアの取り上げ方の歴史的差異が関係している部分があると思われる。たとえば、サー・キース・マードックは、1930年代の世界不況の時代、オーナーを務めていた『メルボルン・ヘラルド』紙において不況問題に関する記事は掲載せず、フットボールの記事を大々的に報じ続けた。このことが、メルボルン(ビクトリア州)でオーストラリア・フットボールが浸透した一因ともいわれている。

(5) この他に、「POWERADE」(Sports & Soft Drink Supplier) がスポンサーとなっている。同社は、EU 等世界展開をしているが、オーストラリアには支社がないことから、同社なりの世界戦略が反映しているのであろう。

(6) チームの再編成にあたっては、ヨーロッパなどでプレイするオーストラリアの選手の呼び戻しや他国からの監督、コーチ、そして選手の招聘が盛んに行われた。横浜 FC の「カズ」こと三浦知良選手がシドニーFCへレンタル移籍も、こうした経緯の中での出来事であった。では、「なぜカズであったのか」という問いに対しては、いくつかの答えが用意されるであろう。シドニーFCの監督がJリーグでもプレイしたリトバルスキー氏であったこと、「シンボル」としてのカズ、そのメディア・コンテンツとしての価値、などの諸要素が組み合わされた結果ともいえる。カズに焦点を当てた特集番組がいくつか放映され、日本への「Aリーグ」の「お披露目」効果もあったといえる。

(7) ただし、こうした戦略上の認識は、1960年代前後から出されてきており、ある意味では「継続的課題」であったととらえられる。

(8) この問題を考える場合、現在のハワード政権の移民政策への視点も不可欠である。

(9) この他、2005年1月、全国組織の名称を、'Australian Soccer Association' から 'Football Federation Australia' へと変更した。'Soccer'から「世界標準」の 'Football'への変更は、ある意味、象徴的である。

(10) Murray G. Phillips, Brett Hutchins and Bob Stewart, 'The Media Sport Complex: Football

and Fan Resistance in Australia', in John Nauright & Kimberly S. Schimmel (ed.), *The Political Economy of Sport*, Palgrave Macmillan, 2005.

<参考文献>

* Andrews, I., 'From a club to a corporate game: the changing face of Australian football', in John Nauright & Kimberly S. Schimmel (ed.), *The Political Economy of Sport*, Palgrave Macmillan, 2005.

* アル・グラスビー(藤森黎子訳)、2002、『寛容のレシビ - オーストラリア風多文化主義を召し上げ』NTT出版(原著: Grasby, A., 1984, *The Tyranny of Prejudice*, Australian Educa Press)。

* ガッサン・ハージ(保苅実・塩原良和訳)、2003、『ホワイト・ネイション - ネオ・ナショナリズム批判』平凡社(原著: Hage, G., 1998, *White Nation: Fantasies of White Supremacy in a Multicultural Society*, Pluto Press Australia)。

* Mangan, J. A. and J. Nauright (ed.), 2000, *Sport in Australasian Society: Past and Present*, Frank Cass.

* Miller, T., G. Lawrence, J. McKay and D. Rowe, 2001, *Globalization and Sport: Playing the World*, SAGE Publications.

* Mosely, P., R. Cashman, J. O'Hara and H. Weatherburn (ed.), 1997, *Sporting Immigrants*, Walla Walla Press.

* 尾崎正峰、2004、「オーストラリアのスポーツ政策研究の現状と課題」一橋大学一橋学会『一橋論叢』第131巻第2号、日本評論社。

* 尾崎正峰、2005、「スポーツ、移民、エスニシティ」『一橋大学スポーツ研究2005』。

* 関根政美、1989、『マルチカルチュラル・オーストラリア』成文堂。

* シェリントン、1985、『オーストラリアの移民』勁草書房(原著: Sherington, G., 1980, *Australia's Immigrants*, Allen & Unwin)。

* 塩原良和、2005、『ネオ・リベラリズムの時代の多文化主義』三元社。